

「古韓尺」が解き明かす 歴史と考古学

東アジアの古代文化を考える会

2012年3月31日(土)

豊島区生活産業プラザ

(前) 韓国国立慶尚大学

招聘教授 新井 宏

Arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp

URI <http://members3.jcom.home.ne.jp/arai-hiroshi/>

講演概要

- 日韓の数多くの遺跡計測値から帰納的に「古韓尺」を発見し発表してから20年以上になる。当初は、その存在を裏付ける文献もなく単に「良く合う尺度」との「仮説」であったが、その後、文献史料による検証、土地制度との関係解析、東アジア計量史上の位置付けなど、多面的な研究を続け、既に18件の論文と2冊の著書を発表している。
- いわば私のライフワークであるが、ちょうど20年目の昨年になって、『出雲風土記』に「古韓尺」の決定的な証拠を見つけ『古代文化研究』に発表した。近年、話題の纏向の建物群や古墳群にも「古韓尺」が利用されていたことがわかり、古墳築造企画の研究ばかりでなく、古墳年代論や古事記研究にも影響を与えている。熱く語りたい。

研究歴の大半は古韓尺

考古学の間では、三角縁神獣鏡問題、炭素14年代問題、古代製鉄問題などについて発言することが多いが、研究歴から言えば、圧倒的に古韓尺の研究が多い。

主観的な研究比率で示すと次の通り

古韓尺研究	60%	論文数	21
三角縁神獣鏡など青銅器研究	15%	論文数	9
炭素14年代研究	10%	論文数	11
古代製鉄研究	15%	論文数	7

古韓尺とは筆者が命名した尺度で、実長は1尺が26.7cm、1歩が1.60m、1里が480mほどである。なお、その量田歩は古韓尺の3歩すなわち4.80mであり、その100歩が1里である。

1. 百家争鳴の古墳尺度論

- そもそも、古代尺度の研究にのめり込んだのは、古墳の尺度研究である。末永雅雄が宮内庁の測量図を『日本の古墳』に載せたのが昭和36年。それ以降、有名な考古学者だけでも、上田宏範、森浩一、甘粕健、白石太一郎、秋山日出雄、宮沢涉、寺沢薫、梅沢重昭(若狭徹)、沼澤豊、櫃本誠一、岸本直文、北條芳隆など実に多くの研究者が古墳の尺度論を発表しているが、ひとつの古墳にひとつの尺度と揶揄されるほどの百家争鳴状態で収斂の方向が見えていない。
- 主観的な議論では收拾できそうもない。そこで考案したのが、統計学に基礎を置くコンピュータ解析の導入である。そこに筆者の出番があると信じたのである。昭和46年であった。
- しかし、古墳の尺度問題は手強かった。誰もが納得するような結果を期待しながら、まったく前に進まなかった。

森浩一『古墳の発掘』の晋尺論

晋尺: 24cm説

大型天皇陵などの墳丘規模が晋尺100尺単位となっているとの説

土地の長さを表示するのは歩単位であり、中国では尺単位の事例はない。

順位	古 墳	メートル(m)	晋尺(尺)
1	和泉 仁徳陵	486	2000
2	河内 応神陵	430	1800
3	和泉 履中陵	360	1500
4	備中 造山	約 350	
5	河内 大塚	330	1400
6	大和 見瀬丸山	318	1300 (900)
7	大和 景行陵	310	1300
8	和泉 にさんざい	290	1200
9	河内 仲津媛陵	286	1200
15	大和 崇神陵	240	1000
16	河内 仲哀陵	239	1000
17	大和 室大墓	238	1000
24	日向 オサホ塚	219	900
24	大和 成務陵	219	900
24	大和 磐之媛陵	219	900

寺沢薫「纏向型古墳」の魯班尺論

「纏向型古墳」が魯班尺で作られたとの説

魯班尺とは、魯の魯班家に伝わったという32cmの尺度。中国の計量史では全く取り上げられていないので日本の工匠が権威付けのため後代の清尺を称したものと思われる。

なお、寺沢は「私見では古墳の多くは魯班尺で整然と換算しようと考えている。しかし、尺度論は、計測個所の選定、計測方法等が理論的に確立しておらず、それが自由な解釈を生む結果ともなっている。従って、今それを深く追求する意図は毛頭ない」と云っている。

寺沢薫:「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』、同志社考古学シリーズ、(1998)、99~111頁

梅沢重昭「群馬大型古墳」の晋尺論

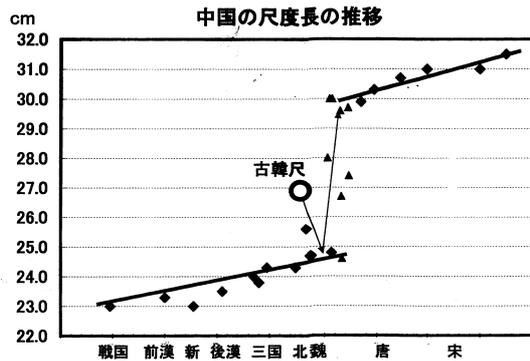
群馬県下には発掘によって比較的信頼し得る計測値を提供している大型古墳が多くある。梅沢重昭は『綿貫親山古墳Ⅰ』(1998)で次のような記述している。

.....墳丘・周堀の築造にあたって使用された基準尺度(モジュール)は、墳丘や周堀各部の計測値に含まれているものと考えられ、その公約数値から帰納すれば、(晋尺)20尺=4.80mであろうと推定している.....この基準尺度は、1尋=1.60mとした場合の3尋=4.80mとする可能性もある.....

ここで尋を「古韓尺の歩」、3尋や「晋尺の20尺」を「古韓尺の量田歩」と読み替えれば、これから紹介する「古韓尺」の体系に完全に一致する。

2. 東アジアの尺度の歴史

	時代	長さの単位			面積の単位			
		1尺	1歩	1町	1里	1歩(坪)	1町歩	1頃
日本	奈良	29.8cm	6尺 1.79m	60歩 107m	300歩 537m	3.2㎡	3600歩 11520㎡	
	江戸	30.3cm	6尺 1.82m	60歩 109m	36町 3930m	3.3㎡	3000歩 10000㎡	
中国	周	20.0cm	8尺 1.60m		300歩 480m			10000歩 25600㎡
	漢	23.3cm	6尺 1.40m		300歩 420m			24000歩 47000㎡
	三国期	24.5cm	6尺 1.47m		300歩 440m			24000歩 51200㎡
	唐	29.8cm	5尺 1.49m		300歩 447m			24000歩 53300㎡
	清	32.0cm	5尺 1.60m		300歩 480m			24000歩 61500㎡
	古韓尺	26.7cm	6尺 1.60m		300歩 480m			



法隆寺建築の記録と様式

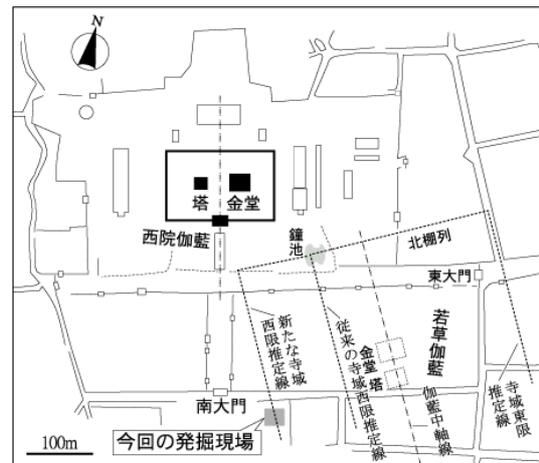
日本書紀 天智九年(670)4月30日
一屋残さず焼失の記事

様式上の特徴(飛鳥様式の特徴)

- エンタシス (胴張り)
- 雲肘木 (肘木と斗マスが一体)
- 垂木が一重 (普通は地垂木と飛燕垂木)
- 卍崩しの高欄
- 高麗尺の使用

中国の尺度長の分布

尺長(cm)	前漢尺	後漢尺	魏尺	西晋尺	東晋尺	南朝尺
22.2 ~ 22.8		4				
22.9 ~ 23.0	6	19				
23.1 ~ 23.2	3	12				
23.3 ~ 23.4	1	18				
23.5 ~ 23.6	2	16				
23.7 ~ 23.8		8	3			
23.9 ~ 24.0		2				1
24.1 ~ 24.2		1	1	1	2	
24.3 ~ 24.4			1	1	1	
24.5 ~ 24.6		1		4	1	
24.7 ~ 24.8						3
24.9 ~ 25.2	1					3



法隆寺と若草伽藍

3. 法隆寺再建・非再建論争

いまでこそ、歴史考古学分野での論争と云えば「邪馬台国論争」であるが、歴史的には、明治38年から始まった「法隆寺再建・非再建論争」の方がはるかに有名であった。

『日本書紀』には天智9年(670)「一屋あますとこなく焼失」と書かれている法隆寺が、明治38年に建築様式の研究家関野貞らを中心にこれを飛鳥様式の建築として「非再建論」を唱えたのである。

これにびっくりした文献史学の喜田貞吉らが反論の筆をとる。これが30年以上にわたって繰り広げられた大論争であるが、昭和14年の若草伽藍の発掘で「非再建説」が成り立たなくなり突然幕を下ろす。

その論争の際に大きな役割を果たしたのが尺度論である。

論争の主役は尺度論であった

- 関野貞が法隆寺非再建論を唱えたのは主として建築様式が飛鳥風であることによるが、その論拠の中核をなすのは、唐尺以前の高麗尺でつくられていることにあった。
- 高麗尺とは、(大宝令)の令大尺と見なされた尺度で、唐尺の1.2倍の長さ35.7cmを一尺とする。その起源は東魏尺(35cm)にあるとされているが、その実にはもともと疑問があった。
- 法隆寺の金堂や五重塔の柱間に唐尺を当てはめてはめても全く合わないが、高麗尺だと良く一致するが多かった。そのため、法隆寺が飛鳥様式である事とあわせて、飛鳥期の建築すなわち非再建の論拠とされたのである。
- しかし、高麗尺が良く合うとは言っても、古韓尺の方が圧倒的によく合っているのである。比較して示す。

法隆寺再建非再建論争史

- 明治38年(1905年)関野貞「法隆寺堂塔非再建論」
 - 平子鐸嶺「法隆寺草建考」
 - 浜田青陵「法隆寺非再建論」
 - 喜田貞吉「法隆寺非再建論を駁す」他
- (法隆寺論争)(薬師寺論争)
- 大正末期 西院伽藍焼土、神獸葡萄鏡発見
- 昭和6年(1931年)会津八一「法隆寺年代私考」
- 昭和14年(1939年)足立康「新非再建論」
 - 石田茂作・若草伽藍の発掘
- 平成15年(2003年)光谷拓実 塔心柱 594年伐採

高麗尺よりも良く合う古韓尺

建物	項目	実測値 (cm)	古韓尺		唐尺		高麗尺				
			尺数	尺長	尺数	尺長	尺数	尺長			
金堂	初重側柱狭間	216.4	8.0	27.1	◎	7.5	28.9	△	6.0	36.1	◎
	初重側柱広間	323.2	12.0	26.9	◎	11.0	29.4	◎	9.0	35.9	◎
	初重内陣廻り	323.5	12.0	27.0	◎	11.0	29.4	◎	9.0	35.9	◎
	初重外陣柱間	216.0	8.0	27.0	◎	7.5	28.8	×	6.0	36.0	◎
	上重両端の間	188.6	7.0	26.9	◎	6.5	29.0	△	5.0	37.7	×
	上重側面中間	296.9	11.0	27.0	◎	10.0	29.7	◎	8.0	37.1	×
	上重中央中間	309.0	11.5	26.9	◎	10.5	29.4	◎	8.5	36.4	△
五重塔	初重中央間	266.7	10.0	26.7	◎	9.0	29.6	◎	7.5	35.6	◎
	初重端間	187.7	7.0	26.8	◎	6.5	28.9	△	5.0	37.5	×
	二重中央	241.9	9.0	26.9	◎	8.0	30.2	×	7.0	34.6	×
	二重端間	162.5	6.0	27.1	◎	5.5	29.5	◎	4.5	36.1	◎
	三重中央	214.8	8.0	26.9	◎	7.5	28.6	×	6.0	35.8	◎
	三重端間	134.5	5.0	26.9	◎	4.5	29.9	×	4.0	33.6	×
四重中央	初重中央	187.9	7.0	26.8	◎	6.5	28.9	×	5.0	37.6	×
	四重端間	106.9	4.0	26.7	◎	3.5	30.5	×	3.0	35.6	◎
	五重	161.7	6.0	27.0	◎	5.5	29.4	◎	4.5	35.9	◎
	回廊	桁行・梁行	375.0	14.0	26.8	◎	12.5	30.0	△	10.5	35.7

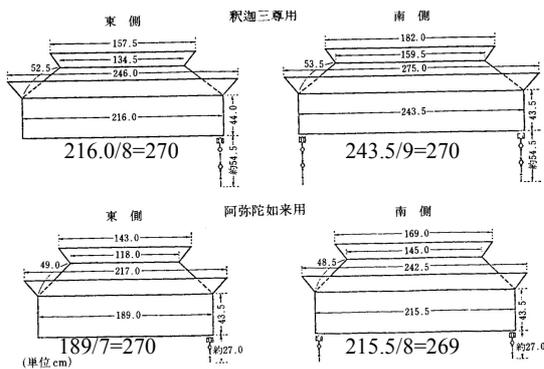
4. 飛鳥・白鳳寺院と古韓尺

- なぜ、唐の文化が滔々として流入している白鳳期になってから、飛鳥様式を色濃く示す法隆寺などが作られたのであろうか。
- その答えは、663年に百済が、668年に高句麗が滅び、多くの亡命者がやってきたことにある。日本は進んだ唐の文化をいきなり受け入れたが、朝鮮半島では中国文化を自己の文化として消化し、古式な飛鳥様式を育てていたのである。
- したがって、現存する法隆寺は、飛鳥様式を示すばかりでなく、柱間、部材寸法、配置関係、装飾材など、全ての点で、古韓尺で作られている。
- この状況は斑鳩の法起寺、法輪寺にも共通しているばかりでなく、発掘調査によって知られる飛鳥・白鳳寺院の礎石間の寸法も不正確ではあるが、多くの点で古韓尺に一致している。

法隆寺建物の部材実測値と古韓尺

建物	部材	実測値 (cm)	古韓尺	
			尺数	尺長
法隆寺金堂	大斗 巾	53.6	2.0	26.8
		32.2	1.2	26.8
	方斗 巾	32.3	1.2	26.8
		24.1	0.9	26.8
	肘木 長	133.4	5.0	26.7
	初重柱 高	373.0	14.0	26.6
法起寺三重塔	上重柱 高	190.0	7.0	27.1
	初層柱 高	321.0	12.0	26.8
	二層柱 高	162.7	6.0	27.1
	三層柱 高	121.5	4.5	27.0

法隆寺金堂の天蓋



法起寺・法輪寺の三重塔

建物部分	法起寺三重塔			法輪寺三重塔		
	実測値 cm	古韓尺		実測値 cm	古韓尺	
初層 中間	264.8	10	26.5	264.8	10	26.5
	187.6	7	26.8	183.3	7	26.2
柱高	320.8	12	26.7			
二層 中間	213.3	8	26.7	210.9	8	26.4
	133.9	5	26.8	132.4	5	26.5
柱高	162.7	6	27.1			
三層 柱間	161.8	6	27.0			
	121.5	4.5	27.0			

回廊桁行・梁行3.75mの例

- 法隆寺の回廊桁行(3.75m)、梁行(3.75m)
- 飛鳥寺の回廊桁行(3.76m)
- 山田寺の回廊東西(3.73m)、南北(3.78m)
- 巨勢寺の回廊梁行(3.8m)
- 薬師寺講堂西側単回廊(3.75m)
- 扶余定林寺東回廊(3.75m)

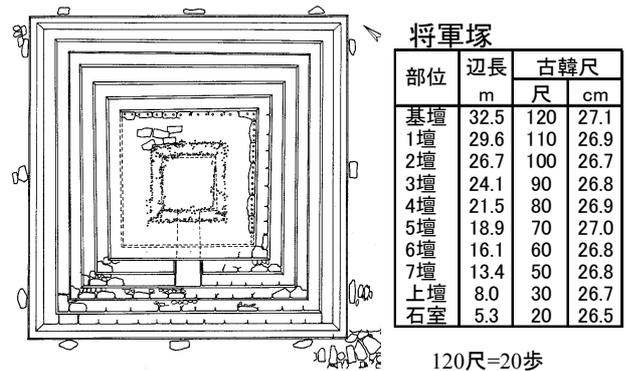
$$3.75\text{m} = \text{古韓尺}(26.8\text{cm}) \times 14\text{尺}$$

5. 高句麗遺跡と古韓尺

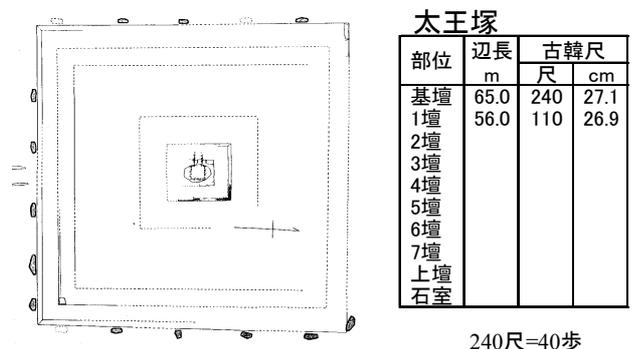
高句麗の遺跡には数多くの積石塚古墳がある。その中でも集安の將軍塚古墳などは、遺構を良く残っていて、尺度を議論するに好適である。

- 集安の將軍塚
- 広開土王碑文の文字椀
- 集安の太王陵
- 山城下の弟塚
- 山城下の兄塚
- 山城下の折天井塚
- 平壤郊外の東明王陵
- 安鶴宮の回廊柱間
- ソウルの石村洞2号墳
- ソウルの石村洞4号墳

高句麗・將軍塚積石古墳



高句麗・太王陵積石古墳



高句麗古墳の古韓尺による歩の適合

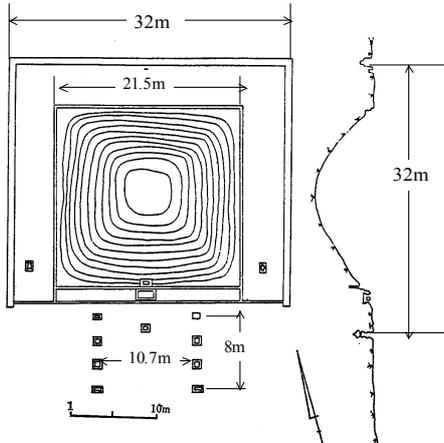
部位	辺長 m	古韓尺		
		尺	歩	m
將軍塚	32.5	120	20	32
將軍塚陵域	96		60	96
太王陵	65	240	40	64
太王陵領域	320 ?		200	320
千秋塚	80 ?		50	80
西大塚	55		35	56
兄塚	22.6	84	14	22.4
弟塚	18.8	70		18.7
折天井塚	21.2	80		21.4

東明王陵

平壤市東南 22km

測定 m	古韓尺	
	尺	cm
32.0	120	26.7
21.5	80	26.9
10.7	40	26.8
8.0	30	26.7
2.67	10	26.7

120尺=20歩



6. 新羅・百濟遺跡と古韓尺

- ・ 新羅慶州の皇龍寺伽藍
- ・ 新羅慶州南山新城の碑文解析と東西長倉
- ・ 新羅慶州芬皇寺石塔平面図
- ・ 新羅慶州王宮第1家屋第2建物址
- ・ 新羅慶州鷄林の官庁建物群
- ・ 新羅二聖山城の長方形建物群
- ・ 百濟益山の弥勒寺伽藍
- ・ 百濟益山王宮里寺金堂・講堂

新羅慶州皇龍寺の主要建物の柱間

建物	項目	実測値 平均(cm)	古韓尺	
			尺数	尺長
木塔	桁行・梁行	316.7	12.0	26.4
	桁行	546.3	20.5	26.6
講堂	梁行	396.8	15.0	26.5
	内陣桁行・梁行	500.3	19.0	26.3
東金堂	外屋AB梁行推定	342.5	13.0	26.3
	桁行(中央5間)	464.5	17.5	26.5
西金堂	桁行・梁行中端間	400.9	15.0	26.7
	桁行(中央3間)	454.8	17.0	26.8
	桁行端2間	419.8	16.0	26.2
	梁行中央(内側)	709.0	27.0	26.3
	梁行端間(外側)	402.4	15.0	26.8

安鶴宮の回廊柱間と古韓尺

遺跡建物名称	桁行 (m)	梁行 (m)	m 尺 尺長		
			m	尺	尺長
南宮第一号宮殿東西回廊	4.25	4.25			
第二号宮殿東回廊	4.25	4.25			
第二号宮殿南回廊	4.20	4.20			
中宮第一号宮殿東西回廊	4.25	4.00	3.72	14	26.6
第一号宮殿南回廊	4.25	4.25	3.80	14	27.1
第二号宮殿北回廊	3.97	4.00	3.97	15	26.5
北宮第一号宮殿東西回廊	4.25	4.25	4.00	15	26.7
第二号宮殿東西回廊	4.25	4.00	4.25	16	26.6
第六・七号宮殿西回廊	4.20	3.80	4.58	17	26.9
西宮南側回廊	3.72	4.00			
西宮第二号宮殿	4.25				
北宮第四宮殿	4.00				
中宮第一号宮殿	4.58				

新羅慶州の南山新城碑

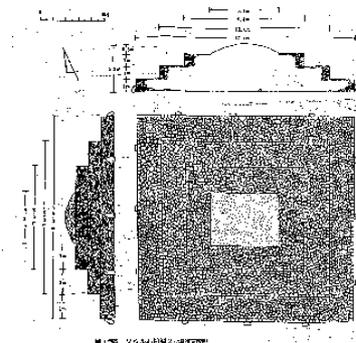
新羅の真平王13年(591)

- 第1碑 受 十一歩三尺八寸 (10.5歩)
 第2碑 受作 七歩四尺 (7.0歩)
 第3碑 受作廿一步 一寸 (19.0歩)

表示距離が公式尺(当時の中国尺24.3cm)によつていたとするなら、古韓尺は26.9cmと計算される。

高句麗積石塚・ソウル石村洞2号墳

測定 m	古韓尺	
	尺	cm
17.4	65	26.8
13.4	50	26.8
9.4	35	26.9
5.4	20	27.0
16.1	60	26.8
12.0	45	26.7
8.0	30	26.7
4.1	15	27.3



百濟益山弥勒寺の主要建物の柱間

建物	項目	実測値 平均(cm)	古韓尺	
			尺数	尺長
中金堂	外屋	329.5	12.5	26.4
	内陣桁行	452.5	17.0	26.6
西金堂	内陣梁行	375.0	14.0	26.8
	桁行	268.6	10.0	26.9
講堂	梁行・外屋桁行	229.7	8.5	27.0
	内陣桁行	504.9	19.0	26.6
西廻廊	外屋	306.8	11.5	26.7
	桁行	333.7	12.5	26.7
北廻廊	桁行	333.0	12.5	26.6

百濟益山弥勒寺の石造の階段

建物	項目	実測値 平均(cm)	古韓尺		
			尺数	尺長	
東石塔	地覆石長さ	北	263	10	26.3
		東・南	295	11	26.8
		西	278	10.5	26.5
	階段第一歩石	北・東	290	11	26.4
		南	322	12	26.8
		東・南	215	8	26.9
階段第二歩石	東・南	214	8	26.8	
	東・南	214	8	26.8	
中門前 中院金堂 講堂	階段幅	527	20	26.4	
	中央階段幅	375	14	26.8	
南側階段	外幅	530	20	26.5	
		420	16	26.3	
	内幅	270	10	27.0	

新羅王京の長3075歩と広3018歩

- 王京の大きさは約3,000歩すなわち方10里であるが、問題はなぜ75歩とか18歩という端数がついたかである。
- 75歩は450尺であり50尺×9、18歩も2歩×9であり、共に9の倍数になっている。王京が1里(300歩)の方格に10区分されていたならばその間を区切る道路としては9路に相当。
- 新羅王京の総面積は10里×10里=100里である。三国遺事の55里はその内の(坊のない)非市街地の面積の意である。
- すなわち55里の残りの45里の部分に360坊(40里)や王宮(5里)があった。『新唐書新羅伝』に「王居金城 環八里」とあり、面積が8里程度と伝えているからである。

7. 三国史記に現れた古韓尺

『三国史記』に記載されている新羅王京については、歴史的に多くの復元案が提出されている。

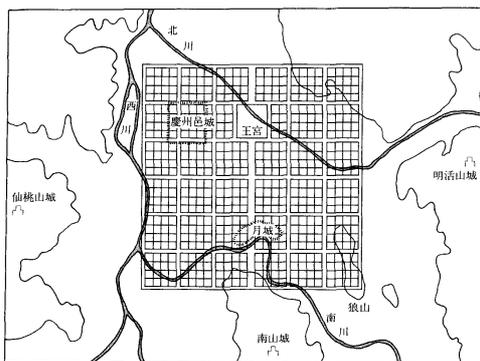
- 藤島玄治郎：1920年代末の慶州の地籍図を基に一边が東魏尺で400尺の方格の坊が東西に8里32区画、南北に8条32区画。
- 尹武炳：120m幅の南北大路を想定、この南北大路を中心として南北と東西方向の道路網によって36坊で構成された王京に復元。方160mの区画を想定している。
- 東潮と田中俊明：尹武炳の復元案では王京が山地にかかることや、月城を坊に取り込んでしまい問題があると考え、その後の発掘調査結果を考慮しながら、東西・南北各18ブロック(方160m)で構成された復元案を提出した。
- 古韓尺の100歩=160m

新羅王京内の道路遺構

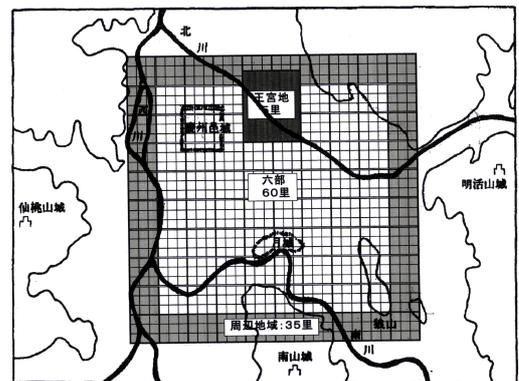
道路遺構名称	路面幅
皇龍寺址 南外廊 東西道路	13.5m
皇龍寺址 東外廊 南北道路	5.5m
皇龍寺址 東外廊 東西道路	5.5m
皇龍寺址 南外廊 南北道路	13m以上
皇龍寺址 西外廊 南北道路	7m以上
芬皇寺 南側 東西道路	9m
城東洞殿廊址 西側 南北道路	13.4m
月城石橋 南側 南北道路	9m
隍城洞製鉄遺蹟 東側 南北道路	6.5m

13.5mは古韓尺の50尺であり、50尺×9=75歩

尹武炳の160m方格復元



三国史記による新羅王京復元図



三国史記・遺事の記事

- [三国史記] 雑志三 地理一 王都條
王都 長三千七十五歩 廣三千一十八歩
三十五里 六部
- [三国遺事] 卷第一 辰韓條
京中十七萬八千九百三十六戸 (一千)三百六十坊
五十五里
- [三国遺事] 卷第五 念佛師條
三百六十坊 十七萬戸

朝鮮半島の条坊160mの例

新羅王京の条坊 160.2m=100歩
古韓尺=160.2m / 100 / 6 = 26.7cm

160m条坊の例

南原小京
尚州邑城(沙伐州)
晋州城
武珍州城

朴泰祐1987「統一新羅時代の地方都市に関する研究」『百濟研究』第18輯 ほか

8. 結負制・代制と古韓尺

- 朝鮮半島では、農地の実面積を把握する頃畝制と、収量基準を考慮した結負制が、新羅時代から近代に至るまで、1200年以上にわたって共存していた。しかし頃畝制や結負制の高麗中期以前の実態については、未だ一致した見解が得られていない。
- それは主として基本史料のひとつである文宗量田法(1069年)の記載に錯誤があり、その解釈をめぐる諸説が提出されていたことによる。
- この頃畝制と結負制の関係を文献から復元し、その結果得られた「束」や「把」の面積が、大化前代の「束代」「把代」の面積と完全に一致したのである。しかも、その面積の基準となっていたのは古韓尺であった。

六寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步

1歩 = 6尺 = 60分 = 360寸 = 36尺

そうなる「六寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步」の記述のどこかに誤記があるというのは学界の共通認識である。それは、1尺にどのような長さを採用しても、知られている1結の面積とは大差があるからである。

白南雲: 曲尺(30.3cm) 1結 = 129,600㎡
 朴克采: 漢尺(23.1cm) 1結 = 75,310㎡
 李丙燾: 金容燮: 周尺(20cm程度) 1結 = 57,800㎡

朝鮮初期 下田 1結 = 14,974㎡
 新羅村落文書沙害瀨村 (755年,825年)
 周長 5725歩 (面積587万㎡ max.)
 面積165.2結 1結 < 35,600㎡

頃畝制と結負制の面積(一致見解)

- 統一新羅時代の面積:
 1頃 = 1結『三國遺事』卷2, 駕洛國記
 1頃 = 100畝 = 方100歩 智證大師塔銘後人註
 古者 百歩爲一畝 百畝當一結
- 朝鮮前期の面積:
 1結 = 57畝 = 14,974㎡
- 三國時代の頃表示 後世に昔の結を頃であると代えて表示した可能性が高い

十分爲一尺の部分に錯誤(朴時亨)

朴興秀, 浜中昇, 李宇泰, 尹善泰, 李泰鎮, 전덕재: 錯誤説同意
 六寸爲一分 十分爲一歩 六尺爲一步
 六寸爲一分 十分爲六尺 六尺爲一步
 1歩 = 6尺 = 10分 = 60寸 = 6尺
 この説を採ると、1結の面積が次に示すように、小さくなりすぎる。
 第一、1歩=6尺なら、わざわざ長い注を付けるのは極めて不自然
 1尺 營造尺(31cm程度) 高麗尺(35.6cm程度)
 1結 = 3,500~5,000㎡

朝鮮初期の下田 1結 = 14,974㎡
 1結 = 頃 = 方100歩 = 20,000~30,000㎡

頃畝制と結負制の面積(不一致見解)

高麗中期以前の実面積: 一致した見解は得られていない。
 それは基本史料である文宗量田法に錯誤があるためである。

文宗量田法(1069年), 『高麗史』卷78, 食貨1, 經理
 定量田歩數 田一結方三十三歩
 (六寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步)
 二結方四十七歩 三結方 ……
 1結 = 33歩 × 33歩 = 1089歩
 1歩 = 6尺 = 60分 = 360寸 = 36尺

新井説 六寸爲一分の部分に錯誤

六寸爲一分の部分に錯誤があるとするならば、次の場合が考えられる。

二寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步
 三寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步
 四寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步
 五寸爲一分 十分爲一尺 六尺爲一步

このように考えれば、文章も重複がなく意味が良く通じる。

二 1歩=12尺 三 1歩=18尺
 四 1歩=24尺 五 1歩=30尺

1結 = 方33歩 = 1089歩

文宗量田法が1結を方33歩すなわち1089平方歩とする記述は奇妙ではあるが、次のような金石文によって裏付けられているので誤りではない。

若木郡淨兜寺石塔造成記(956年)
 代下田 長廿七歩方廿歩 … 承孔伍百四拾
 結得四拾玖負四束
 27歩 × 20歩 = 540歩 = 49負4束
 1結 = 540歩 / 0.494 = 1093歩
 文宗量田法
 1結 = 方33歩 = 1089歩

高麗圖經に見える結面積

宋の徽帝が派遣した徐兢が宣和5年(1123年)に著わした『宣和奉使高麗圖經』に次のような記載がある。

田每一百五十歩爲一結

文宗量田法の約50年後のことである。

中国人の徐兢の考えでは、150歩は歩=5尺なので750尺であり、これが文宗量田法の33歩に対応しているということは、33歩が意味する量田歩は、

750尺 / 33 = 23尺ということになる。

そうであれば、四寸爲一分すなわち1量田歩=24尺が最も近い。

文宗量田法の尺は?

文宗量田法の記述が「四寸爲一分」と復元されたことで、次に問題となるのは、その1尺の長さである。

$$1 \text{ 量田歩} = 4 \text{ 尺} \times 6 = 24 \text{ 尺}$$

$$1 \text{ 結} = (33 \times 24 \text{ 尺})^2 = 62,726 \text{ 平方尺}$$

世宗19年(1437年)頃畝制によると

$$1 \text{ 頃} = 60,000 \text{ 平方尺 (周尺)}$$

したがって、1結 \div 1頃とすれば、文宗量田法の尺は朝鮮半島で復古尺として使われた「周尺」と云うことになる。

崇福寺碑の細註問題

このような研究の進捗の中で、極めて重要な研究成果が飛び込んできた。崇福寺碑に関する尹善泰の研究「新羅崇福寺碑の復元」『佛教美術』16, 2000である。

東俗 以五畝減百弓爲結

尹善泰はこの細註を崔致遠の自註と結論付けたのである。

弓は長さの歩と面積の歩の混亂を避けるために歩の代用として使われた単位である。

例) 营造尺長五尺爲弓 方五尺爲歩 畝積二百四十歩 里長三百六十弓 『清朝統文獻通考』

そうすると、東俗 以五畝減 方百弓爲結は次のようななる。

$$1 \text{ 結} = 100 \text{ 弓} \times 100 \text{ 弓} - 240 \text{ 歩} \times 5 = 8800 \text{ 歩}$$

周尺は復古尺

中國の古典『禮記』王制篇によれば

古者 以周尺八尺爲歩

朝鮮半島における周尺とは復古尺であり、実長が約20cmであり、その1歩は1.60mである。

文宗量田法 1結 = 方33歩 = 方(33 \times 24周尺)
= 方99歩 = 方100歩

智證大師塔銘後人註

古者 百歩爲一畝 百畝當一結

$$1 \text{ 結} = 100 \text{ 歩} \times 100 = \text{方}100 \text{ 歩}$$

$$\text{古韓尺}6 \text{ 尺}1 \text{ 歩} = \text{周尺}8 \text{ 尺}1 \text{ 歩} = 1.60 \text{ m}$$

新羅時代には1結は0.9頃であった

智證大師塔銘後人註

$$\text{百歩爲一畝 百畝當一結} \quad 1 \text{ 結} = 10,000 \text{ 歩}$$

崇福寺碑崔致遠の自註

$$\text{以五畝減 方百弓爲結} \quad 1 \text{ 結} = 8,800 \text{ 歩}$$

ここで1結を方33歩とする奇妙な規定が生まれた理由がある。新羅時代には1結が0.9頃だったのである。

百濟(結負制) 里(井) = 10結, 結 = 100負

新羅(頃畝制) 里(井) = 9頃(中國古制), 頃 = 100畝

$$1 \text{ 結} = 0.9 \text{ 頃}$$

頃の実面積

朝鮮前期の周尺の実長は次の通りである。

朴興秀説 20.81cm

李宗峯説 20.5-20.7cm

したがって、世宗19年頃畝制

$$1 \text{ 頃} = 60,000 \text{ 平方尺} = 25,709 \text{ m}^2$$

一方、三国時代の古韓尺(26.7cm)の100歩(160m)の方格を当時の1頃とするならば次の通りである。

$$1 \text{ 頃} = \text{古韓尺}方100歩 = 160 \text{ m} \times 160 \text{ m} = 25,600 \text{ m}^2$$

ここに、世宗19年の頃の面積も新羅時代の160m方格、すなわち古韓尺の方100歩に一致していたことが判る。

したがって、文宗量田法の1歩は古韓尺の3歩=4.80m

朝鮮半島の古い結負制

里(井) = 方300歩 量田歩 = 3歩

里 = 90,000歩 = 10,000量田歩

結 = 9,000歩 = 1,000量田歩

負 = 90歩 = 10量田歩

束 = 9歩 = 1量田歩

古韓尺の3歩を1量田歩とすると束の面積は極めて簡単になり、その方格で示される。ここに3歩を1量田歩とする複雑な制度(33歩 \times 33歩)の生まれた原因を解明できたと考える。

1頃面積の推移

統一新羅以前 方100歩

1歩 = 6尺 (古韓尺 = 26.7cm)

$$1 \text{ 頃} = (0.267 \text{ m} \times 6 \times 100)^2 = 25,600 \text{ m}^2$$

高麗文宗23年 1頃 = 1結 = 方33歩

1歩 = 24尺 (周尺 = 20.2cm)

$$1 \text{ 頃} = (0.202 \text{ m} \times 24 \times 33)^2 = 25,595 \text{ m}^2$$

朝鮮初期世宗19年 24,000歩

1歩 = 5尺 (周尺 = 20.7cm)

$$1 \text{ 頃} = (0.207 \text{ m} \times 5)^2 \times 24,000 = 25,709 \text{ m}^2$$

以上によって、制度は変わったければ、頃の実面積に変化が無かったことが判る。

日本の代制と朝鮮半島の結負制

大化改新の前すなわち律令制の町段歩制の前には、日本の土地制度は代制と云われる方式であった。

その詳しいことは判っていないが、土地面積の単位に束代と把代があり、町段歩制との換算関係はつぎのようになっていた。

日本代制 1町 = 500束代 \rightarrow 1束代 = 23.1m²

1把代 = 2.31m²

朝鮮半島の結負制 1束 = 方1量田歩(古韓尺の3歩)

1束 = 23.0m²

1把 = 2.30m²

束把は中國では見られない単位で、日本と朝鮮半島だけに存在する。しかも、その実面積から、表示、発音まで一致していることから見て、代制が朝鮮半島の結負制に由来することはもはや疑問の余地がない。

束(Taba) = 束(다발)

11. 出雲風土記に現れた古韓尺

『出雲風土記』の里程と宍道郷三石記事に現れた「古韓尺」
『古代文化研究』(島根県古代センター)第19号、2011.3

- 出雲風土記には異様に詳しい里程表記が多くあるが、これは旧里程からの換算と考えられ、旧里程に戻すと、キリの良い古韓尺の15里とか20里となる。
- 意宇郡宍道郷の石ノ宮神社に現存する猪像石2個と追猪犬像石の寸法記録が9個記載されているが、実測結果と対照すると「古韓尺」に一致している。

朝鮮山城の周長換算例

城名	史料A 歩	史料B 尺	比率 尺/歩	城名	史料A 歩	史料B 尺	比率 尺/歩
宝蓋山城	942	2529	2.685	靈光邑城	547	1469	2.686
江陵邑城	784	2108	2.689	尚州邑城	576	1549	2.689
大母山城	290	780	2.690	円山城	324	871	2.688
邑石城	362	974	2.691	小伯山城	531	1428	2.689
案安城	592	1592	2.689	鎮海県城	166	446	2.687
修因山城	1396	3766	2.691	古京城	379	1019	2.689
錦城山城	1095	2946	2.690	黄石山城	1087	2924	2.690
邑石城	1162	3126	2.690	金貴山城	591	1587	2.685

史料A 『世宗実録地理志』(1453年)

史料B 『新增東国輿地勝覽』(1530年)

『経国大典』(1469～1485年)に示された「周尺」の6尺1歩と布帛尺(遵守)の比を求めると2.697である。

古韓尺を明示する2種類の記事

- 異様に詳しい里程表記が多くある。これは旧里程からの換算と考えられ、旧里程に戻すと、キリの良い15里とか20里となる。その結果、旧里程は「古韓尺」であったことが判る。
- 意宇郡宍道郷の石ノ宮神社に現存する猪像石2個と追猪犬像石の寸法記録が9個記載されているが、実測結果と対照すると「古韓尺」に一致している。
- すなわち、異なる種類のふたつの記録が一致して「古韓尺」を明示している。

出雲風土記の距離記載と古韓尺の里

出雲風土記記載内容	天平尺里程			復元里		換算率
	里	歩	総歩数	里	歩	
国庁(黒田駅)から千酌駅*	34	110	10,310	39	11,700	0.881
国庁(黒田駅)から野城駅	20	080	6,080	23	6,900	0.881
出雲郡家から佐雑村	13	064	3,964	15	4,500	0.881
飯石郡家から興曾紀村	28	060	8,460	32	9,600	0.881
飯石郡家から備後国堺	39	200	11,900	45	13,500	0.881
仁多郡家から備後国堺	37	000	11,100	42	12,600	0.881
意宇郡家から東北橋縫郷	32	180	9,780	37	11,100	0.881
意宇郡家から東南母理郷	39	190	11,890	45	13,500	0.881
意宇郡家から正西完道郷	37	000	11,100	42	12,600	0.881
嶋根郡家から正東方結郷	20	080	6,080	23	6,900	0.881
出雲郡家から西北杵築郷	28	060	8,460	32	9,600	0.881
神門郡神門水海の周	35	074	10,574	40	12,000	0.881
出雲郡西門江の周	3	158	1,058	4	1,200	0.882
出雲郡家から正北出雲御崎山	28	060	8,460	32	9,600	0.881
意宇郡家から正南暑垣山	20	080	6,080	23	6,900	0.881
神門郡家から東南蔭山	5	086	1,586	6	1,800	0.881
仁多郡家から正南阿伊川源出	37	000	11,100	42	12,600	0.881

天平尺を29.8cmとすると古韓尺は26.3cm

出雲風土記の里程記載

- 天平五年(733年)の勸造。現存する風土記で一番完本に近い。「国引き神話」を始めとして、記紀神話とは異なる伝承がある。
- 25000字ほどの長文は、総記、各郡記、巻末記に分かれているが、実質的には地理志であり、その内容のほとんどが郡名、郷名、社名、山川湖名の紹介である。
- その中でも、冒頭部分から「東西一百卅七里一十九歩、南北一百八十二里一百九十二歩」とあるように地名間の距離の記載が詳細を極める。
- しかも里単位の表示で十分な里程について、1歩単位あるいは10歩単位で示されているのが、全体の40%にも及んでいる。
- これらの記載を現代の地図に重ねると風土記の頃の正確な地図が復元できる。

意宇郡宍道郷の三石

宍道郷 郡家正西卅七里 所造天下大神命之追猪

猪像 南山有二 一長二丈七尺 高一丈 周五丈七尺
一長二丈五尺 高八尺 周四丈一尺

追猪犬像 長一丈 高四尺 周一丈九尺

其形為石 無異猪犬 至今猶有 故云宍道

ここに記載された猪像・追猪犬像の石は、現在の宍道町の石ノ宮神社に残っている。(この伝承との関係で宍道は、「シシミチ」と読み、猪の道とする説がある)

そのため、ここに記載された尺の長さがいくらのか検証できる。

詳細な里程記載とその推定原因

- 異様に詳しい距離の表記例
(出雲郡記)西門江、周3里158歩 (4里)
(出雲郡記)通意宇郡塚佐雑村、13里64歩 (15里)
(神門郡記)神門水海、周35里74歩 (40里)
(意宇郡記)野城駅、郡家正東20里80歩 (23里)
- 現在でも尺や坪をメートル法に換算して端数をつけて表示している例があることから類推できるように、旧尺度系から換算された数値の可能性が高い。()に旧里推定
- 朝鮮山城の記載では、土地計測単位系が変更されると、次代には換算した値で示している例が多い。
- 『三国史記』に記載された山城の周も後代に換算された可能性が高いことを指摘したこともある。

出雲風土記(石ノ宮神社三石)の古韓尺

	風土記	実測値	尺の長さ
猪像石A	周	57尺	1515cm
	高	10尺	267cm
	長	27尺	715cm
猪像石B	周	51尺	1367cm
	高	8尺	213cm
	長	25尺	675cm
犬像石	周	19尺	509cm
	高	4尺	106cm
	長	10尺	250cm

10. 江田船山古墳の鉄刀

『国宝銀象嵌銘大刀江田船山古墳出土保存修理報告書』

江田船山古墳出土の国宝銀象嵌銘大刀には
「用大鉄釜并四尺延刀」とある。

この大刀の長さを東京国立博物館で復元したところ、
107cmとなった。計算すると $107\text{cm} \div 4 = 26.75\text{cm}$ で古韓尺に一致する。

11. 終末期古墳と古韓尺

- 終末期の古墳は小型化しており、墳丘に関しては、尺度を議論するのに適さない。ところが、凝灰岩の切石を使用した石室には尺度を論ずるのに適している。
- 特に約500個のほぼ同形同大の石材を組み合わせて均整のとれた形に造られた東明神古墳は、尺度研究には欠かせない。
- これらの古墳群について、石室長・石室巾を基にして、公約数的なモジュールを求めると、52.3cmであり、これは古韓尺の2尺である。
- その他、終末期の古墳の尺度についてまとめる。

終末期古墳の石室の尺度

古墳名	石室長 cm	復元尺 cm	石室幅 cm	復元尺 cm
東明神古墳	312 D	12 316	206 C	8 210
マルコ山古墳	271 B	10 263	128.5	5 132
高松塚古墳	265.5 B	10 263	103.5 A	4 105
石のカラト古墳	260 B?	10 263	103 A	4 105
平野3号墳	212 C	8 210	106 A	4 105
御嶺山古墳	222 ?	8 210	141 ?	5 132
平野塚穴山古墳	305 D	12 316	150 ?	6 158
牽牛子塚古墳	210 C	8 210	290 120	11 289 4.5 118
陸山里東1号墳	268 B	10 263	110 A?	4 105

表中のA, B, C, Dは寸法をグループ化したもの

A:B:C:D = 2:4:5:6の関係があり、モジュールを求めると52.5cm

いよいよ古墳尺度論へ参入(?)

- 私は「古墳尺度問題」から古代尺度の研究に入った。しかし、百家争鳴の状況にあって、私こそがコンピュータを利用して、最も科学的な理論(仮説)を提出できるという自負を持ちながら、その希望は挫折した。
- そして進んだのが、日本の古墳尺度問題から離れて、東アジアの計量史の中で、建造物などの遺跡資料を広く求め、それを土地制度との関連で研究する方向であった。そして、朝鮮半島系の古韓尺という誰も知らなかった結論に到着した今日、改めて古墳尺度論に参入できることを喜んでいるはずである。
- ところが、実は気が重いのである。古墳尺度問題は長い研究史があり、実に多くの研究者が試論を提出していて、彼らの「無言の抵抗」を意識せざるを得ないのである。しかも古墳尺度研究者にはマニアックな方も多く、なかなか他の学説を受け入れないからである。

12. 群馬県下の大型古墳と古韓尺

群馬県下には発掘によって比較的に信頼し得る計測値を提供している大型古墳が多くある。梅沢重昭は『綿貫観音山古墳Ⅰ』(1998)で次のような記述している。

.....墳丘・周堀の築造にあたって使用された基準尺度(モジュール)は、墳丘や周堀各部の計測値に包含されているものと考えられ、その公約数値から帰納すれば、(晋尺)20尺=4.80mであろうと推定している.....この基準尺度は、1尋=1.60mとした場合の3尋=4.80mとする可能性もある.....

すなわち、1.60mと4.80mが基礎モジュールだと云っているわけで、これは古韓尺の1歩と量田尺の1歩そのものである。

13. 超大型前方後円墳と古韓尺

森浩一『古墳の発掘』の晋尺論で最初に提出されたように、超大型前方後円墳の墳丘長は晋尺の100尺(24.0m)の単位で良く合っているという。24.0mは古韓尺の量田歩(4.80m)の5歩である。その後の研究で墳丘長に変化も生じているので、まとめて示す。

最大の前方後円墳である大仙陵古墳(伝仁徳陵)の墳丘長は量田歩の100歩(すなわち1里)であり、以下、誉田御廟山古墳(伝応神陵)が90歩、石津ミサンザイ古墳(伝履中陵)、造山古墳が75歩、河内大塚山古墳が70歩、箸墓古墳、渋谷向山古墳(伝景行陵)、土師ニサンザイ古墳、作山古墳、仲ツ山古墳(伝中津媛陵)が60歩、行燈山古墳(伝崇神陵)、室宮山古墳、岡ミサンザイ古墳(伝仲哀陵)が50歩などとする結果に置き換えができるのである。

超大型前方後円墳の古韓尺

古墳名称	墳丘長	古韓尺復元長		一致度判定
		量田歩	歩 m	
1 仁徳陵	486	100	300 480	◎
2 応神陵	425	90	270 432	△
3 履中陵	360	75	225 360	◎
4 造山	360			
5 河内大塚	335	70	210 336	◎
7 仲津媛陵	290	60	180 288	◎
8 箸墓	290			◎
9 景行陵	289			◎
10 土師ニサンザイ	290			◎
11 作山	286			◎
14 崇神陵	242	50	150 240	◎
15 仲哀陵	242			◎
16 室宮山	238			◎

14. 纏向建造物・古墳と古韓尺

2009年11月、桜井市教委によって纏向遺跡の大型建物群の配置関係や桁行・梁行が明らかにされた。その中でも、東西4間(19.2m)、南北4間(12.4m)の建物は「卑弥呼の宮殿か」とする見解もあり、大きな反響を呼んだばかりでなく、古墳時代初期の遺跡としてはじめて尺度問題を論議し得るもので、そこには古韓尺が色濃く認められた。

また、纏向遺跡の近辺には、いわゆる「纏向型古墳」として、纏向石塚古墳、矢塚古墳、東田大塚古墳、ホケノ山古墳、箸墓古墳があり、さらには崇神陵(行燈山古墳)、景行陵(渋谷向山古墳)、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳などもある。

これら纏向型古墳については、かつて寺沢薫が魯班尺(32cm)説を提示していた。これを1.60mの古韓尺の歩と読み替えれば、わかるように、古韓尺が良く適合している。

古韓尺に一致する纏向建物群

纏向建物跡の構成	長さ m	古韓尺			差	適合	
		柱間	総長	歩			
建物A 東西	4.8	18	3	4.8	0	◎	
建築B 南北	5.2	20	—	5.3	0.1	○	
建築C 東西	4.8	18	3	4.8	0	◎	
建物C 東西	3間	8.0	30	5	8.0	0	◎
		2間	5.3	10	20	—	5.3
建物D 桁行	4間	19.2	9	72	12	19.2	◎
		2間	6.2	12	24	4	6.4
建物Bと建物Cの間隔	5.2	20	—	5.3	0.1	○	
建物Cと建物Dの間隔	6.4	24	4	6.4	0	◎	
建物Bの両側の柵間	8.0	30	5	8.0	0	◎	
建築C部の柵間	26.8	50	—	26.7	0.1	◎	

15. 箸墓相似墳問題と古韓尺

箸墓には相似形の古墳が存在しているとの指摘がある。北条芳隆をはじめて指摘し、後に撤回したようであるが、その後も同様な議論が続いている。

箸墓を基準にすると、浦間茶臼山古墳(墳丘長140m)は1/2、五塚原古墳(94m)と元稻荷古墳(94m)は1/3、湯迫車塚古墳(48m)は1/6、その他にも穴甘山王山古墳(68.5m)が1/4、椿井大塚山(190m?)が2/3、弁天山A1号墳(120m)が5/12となっているのである。

注目すべきことは、箸墓を12とすると、各々の数値が6、4、4、2、3、8、5となることである。ここから、箸墓の墳丘長(288m)を基にしてモジュールを求めると24.0mである。これは、古韓尺の量田歩(4.8m)の5歩である。

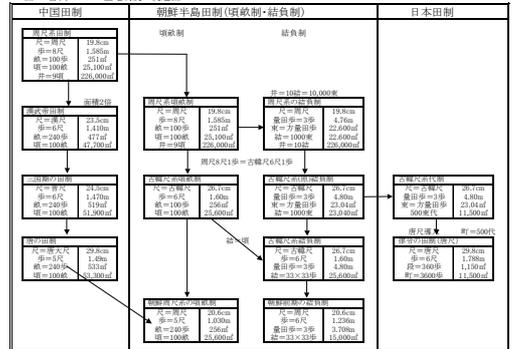
古韓尺に一致する纏向古墳群

古墳名称 (データ出典)	計測 部位	m	古韓尺(26.7cm)				魏尺(24.0cm)			
			歩	計算	差	判定	尺	計算	差	判定
纏向石塚 (第9次調査)	墳丘長	96	60	96	0	◎	400	96	0	◎
	後円径	64	40	64	0	◎	267			×
	前方長	32	20	32	0	◎	133			×
纏向矢塚	墳丘長	96	60	96	0	◎	400	96	0	◎
	後円径	64	40	64	0	◎	267			×
	前方長	32	20	32	0	◎	133			×
東田大塚	墳丘長	96	60	96	0	◎	400	96	0	◎
	後円径	64	40	64	0	◎	267			×
	前方長	32	20	32	0	◎	133			×
箸墓 (第7次調査)	墳丘長	288	180	288	0	◎	1200	288	0	◎
	後円径	160	100	160	0	◎	667			×
	前方長	128	80	128	0	◎	533			×
ホケノ山	墳丘長	80	50	80	0	◎	333			×
	後円径	55	35	56	1	○	233			×
	前方長	25	15	24	1	○	100	24	1	○

計測長の出典は、奈良文化財研究所のデータベース『集成』ほか

16. 古韓尺の東アジア史

図2 古代アジアの土地制度の変遷



古韓尺に一致する纏向近辺の前方後円墳

古墳名称 (出典)	計測 部位	m	古韓尺(26.7cm)				魏尺(24.0cm)			
			歩	計算	差	判定	歩	計算	差	判定
行燈山	墳丘長	240	150	240	0	◎	170	245	3	○
	後円径	145	90	144	1	◎	100	144	1	◎
	前方長	95	60	96	1	○	70	101	6	×
渋谷向山	墳丘長	289	180	288	1	◎	200	288	1	◎
	後円径	159	100	160	1	◎	110	158	1	◎
	前方長	130	80	128	2	○	90	130	0	◎
桜井茶臼山	墳丘長	207	130	208	1	◎	140	202	5	×
	後円径	110	70	112	2	○	80	115	5	×
	前方長	97	60	96	1	◎	70	101	4	×
メスリ山	墳丘長	224	140	224	0	◎	160	230	6	×
	後円径	128	80	128	0	◎	90	130	2	○
	前方長	96	60	96	0	◎	70	101	5	×
大仙陵 仁徳天皇陵	墳丘長	486	300	480	6	◎	340	490	4	◎
	後円径	244	150	240	4	◎	170	245	1	◎
	前方長	242	150	240	2	◎	170	245	0	◎

後円部径は(墳丘長-前方長)で計算した

17. 古韓尺から歴史・考古学へ

土器や瓦、青銅器などの有形遺物とは異なるが、尺度は考古学や歴史学において無形遺物であり、当然、その研究手段としていずれ大きな地位を占めるであろう。

そのため、古韓尺の宣伝を自制して、次の世代に期待して、地味な学会誌中心に研究活動を続けてきた。古墳尺度論に積極的でなかったのはその反映である。古墳尺度論は「百家争鳴」であり、自説を強く主張すれば、潜在的に、有力な研究者の間に百人の敵を作る。それよりも時間が解決してくれるように、出来るだけ、状況を正しく書き出して置きたいと思っている。

しかし、今日は気軽に話をさせて頂いた。ある意味で、「東アジアの古代文化の会」に育てて頂いたお礼のつもりでもある。

纏向附近の古墳の木槨・木棺・石室

古墳名称	報告値	古韓尺	
		長さ	歩
ホケノ山古墳	木槨の長さ	6.7m	25尺 (6.7m)
	木槨の巾	2.7m	10尺 (2.7m)
	木棺の長さ	5.3m	20尺 (5.3m)
	木棺の巾	1.3m	5尺 (1.3m)
桜井茶臼山古墳	石室の長さ	6.75m	25尺 (6.7m)
	石室の巾	1.27m	5尺 (1.3m)
	木棺の長さ	4.89m	3歩 (4.8m)

古韓尺の研究過程でも新提案をしている

古韓尺が認知されるにしたがって、より直接的な形で、歴史や考古学に対する影響を与えるであろうが、今までの研究過程に置いて、既にいくつか新問題を提起している。

- ① 『三国史記』の山城周長記述に誤りを発見し、その事から1481年の『東国輿地勝覽』のころまで異本が存在していたことを示した。
- ② 慶州王京の新復元案を示した。
- ③ 『出雲風土記』に「原出雲風土記」が存在していたことを強く示唆した。
- ④ 古韓尺の始まりと関連し、日本の古墳時代の始まりについて問題提起した。